



写真上：初めての発表会。左小指を骨折しながらも参加した(1988年、小学2年生のころ)
写真下：2005年3月27日 大阪フィルハーモニーとヴィヴァルディ「四季」を演奏。ソリストを務める

ゲスト ● フレッシュアールティスト賞
ヴァイオリニスト

大阪フィルハーモニー交響楽団首席コンサートマスター

長原幸太氏

自分の音をまっすぐに お客さんに届けたい



プロフィール

1981年、広島県呉市生まれ。東京芸術大学在学中にジュリアード音楽院に留学。1994年ヴィエニャフスキー国際ヴァイオリンコンクール17歳以下の部3位。98年日本音楽コンクール最年少優勝。12歳で東京交響楽団と共演したのを皮切りに、日本各地の主要オーケストラ、小澤征爾氏、故・岩城宏之氏など名指揮者と共演する。これまで村上直子、小栗まち絵、故・工藤千博、澤和樹、ロバート・マンの各氏に師事。2004年大阪フィルハーモニー交響楽団首席客演コンサートマスターに就任。2006年4月より首席コンサートマスターとなる。

——音楽の道に進まれたきっかけを教えてください。

長原 母がピアノの先生で、僕も3歳から習い始めたんですが、ピアノはどうしても合わなくて続きませんでした。でも母としては自分と一緒にできる趣味が欲しかったらしく、今度はヴァイオリンをすすめたんですね。僕は音楽と並行して野球やサッカーもやるスポーツ少年だったんですが、小5のときに小栗まち絵先生とお会いして、そこから真剣に音楽に取り組みようになりました。また、高校に入るころに澤和樹先生にお会いして、本気で音楽の道に進みたいなら私が面倒を見るから東京来なさいと言っていたとき、東京芸大付属高校に進みました。

——スズキ・メソッドの創始者である鈴木鎮一先生に師事されたのは、どんなきっかけからですか？

豊田 最初は父が鈴木先生に習いに行っていた、私を連れて行くようになったんです。私は3歳6カ月で定期発表会に出て、父の伴奏でヴァイオリンを弾きました。とても聴けたものじゃなかったと思いますが、当時はそんな子どもはほとんどいないので結構驚がれましたね。父は教育熱心で、私を鈴木先生に習わせるために、当時住んでいた浜松から先生

のいる名古屋に引っ越して、その後また先生を追って東京に移りました。ただ、戦争が始まると先生は木曾に疎開されて、私も父を亡くし、音楽から完全に離れた。一時は工業高校に入って建築家を目指したこともあります。でも終戦後すぐ、NHKラジオの「尋ね人の時間」で先生が私を探してくださり、それが縁で再会がかない

フレッシュアールを受け止め 集中して弾く(長原)

——長原さんは若くしてコンサートマスターを任されていますが、どんな役割が求められる仕事なのでしょう？

長原 指揮者の意向を汲んで、楽団員の演奏を取りまとめるのがコンサートマスターの役割です。ただ、会社で例えれば指揮者が社長なわけですが、コンサートマスターとしては、社長命令をこなすだけでは面白くない。音楽的に正しくないと思えば意見することも必要です。そういった部分はフレッシュアールですが、やりがいでもあると思っています。

——ご自身はどんな演奏スタイルを目指していますか？

長原 昔はお客さんの目を惹きつけなくちゃいけないと思って、派手に体を動かして演奏したこともありましたが、今はほとんど体を動かさずにヴァイオリンを弾くんです。オーケストラではコンサートマスターとして楽団員へ合図をする必要があるのですが、ソロや少人数で弾くときはほとんど動かない。理由は、お客さんにしっかりと音を届けたいから。音には指向性があるので、体を動かすと音の飛ぶ方向がブレてしまう。すると、まっすぐにお客さんに届かないんです。

豊田 素晴らしい！そうなんです。今のヴァイオリニストは上手だけど、体をくたくたにやさせすぎるんですよ。だから音もくたくたになっちゃう。いや、実に素晴らしい。

長原 実は今「すごく緊張する時期」なんです。舞台上立つのが正直怖いときがある。以前、



教え方が厳しいのは当たり前。 音楽の道は厳しいのだから

ゲスト ● 特別賞

ヴァイオリニスト 社団法人 才能教育研究会芸術監督

豊田耕児氏



写真上：鈴木鎮一先生と日比谷公会堂で(1969年)
写真下：ベルリン放送交響楽団で第一コンサートマスターを務める(前列左)

プロフィール

1933年、静岡県浜松市生まれ。幼少よりスズキ・メソードの創始者として知られる鈴木鎮一氏に師事。1952年フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院に学ぶ。卒業後、ジョルジュ・エネスコ氏、アルテュール・グリュミオー氏に師事。ライン室内楽団第一コンサートマスターを3年、ベルリン放送交響楽団第一コンサートマスターを17年、ベルリン国立芸術大学ヴァイオリン科教授を21年間務める。また、帰国して草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバルの創立および音楽監督を10年間、群馬交響楽団の音楽監督を6年間務めている。現在、国際スズキ協会会長、(社)才能教育研究会芸術監督。

あるプロ野球の試合前に、3万人の観衆の前で『君が代』を弾いたことがあって、そのとき初めて脚が震えました。あのとき、もし体を動かして弾いていたら、少しは緊張が紛れていたかもしれませんけど、やっぱりそこは音楽に集中したかったので、自分をごまかさずに弾きました。ただ、それ以来緊張するようになってしまう。僕の場合、緊張する・しないは周期的なもので、そのうちまたしなくなると思うんですけど。

音楽への意識を高める教育を大事に(豊田)

——豊田さんは若いころにヨーロッパに渡られています。当時は海外に出られる日本人は少なかったのでしょうか。

豊田 ええ。最初はフランス政府の給費生として留学しました。海外に行くなんてほとんど考えられないような時代だし、音楽をやる人もほとんどいなかった。だから自分は選ばれた分、なんとしてもやらざるを得ない、運命づけられているという気持ちがあるんですけど強かったですね。

パリの音楽院を卒業してからは、ルクセンブルクやケルンのオーケストラで働いて、その後ベルリン放送交響楽団に移りました。当時、ベルリンは私たちの憧れ。音楽の聖都で、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーやブルノ・ワルターといった有名な音楽家はみんなベルリンで活躍していました。だから最初にオーディションの誘いをいただいたときは、まあどうせダメだろうけど、ベルリンに行けるし、しかも旅費も全部出してくれるというので、じゃあ行ってみようかと(笑)。だから少し気持ち

ちの余裕があったんでしょね。運良く受かって、もう50年近くになります。

——現在は、音楽教育に尽力されています。

豊田 教育は本当に大事だと思っています。技術から入ると音楽への愛情が育たない。だからスズキ・メソードは、まずいい音楽を聴かせて、それで子どもたちの音楽への意欲を高める。すると伸びが早いです。そうした考えが受け入れられて、今はずいぶん世界にも広まりました。

ドイツから帰国して草津で音楽祭を創立し音楽監督を10年、群馬交響楽団の音楽監督を6年務めました。が、厳しすぎて「鬼」と言われてました(笑)。でも、音楽に対する意識をもっと高めなければいけないと思ったし、それによって楽団が活気づいて演奏レベルが高まったのも確かだと思います。

——最後にこれからの抱負をお聞かせください。

長原 僕は日本という国が好きだし、日本の音楽は世界に負けていないと思っています。ただ、それにはやはり世界を知っておく必要もありますから、最近海外で仕事をすることも考えています。もちろん、その場合も将来は必ず日本に帰ってくるつもりです。日本人としての誇りを持って、世界を相手に活躍できたらいいですね。

豊田 私自身、勉強不足でなかなかできなかったことを勉強していきたいですね。そして若い人たちに学んだことを伝えていきたい。今教えている現場では、根本から教え直さないといけないことも多くて、「ここは病院みたいだなあ」なんて言ってます。私はやっぱり厳しいと言われますけどね、音楽の道がそもそも厳しいんだから、それは当たり前なんですよ。